

日本表面科学会エピソード

日本表面科学会と私

清山哲郎*

表面科学会を創立しようという話が始まったとき、私は上田隆三先生から声をかけられて発起人に名を連ね、上京の折りに創立準備会に何度か出席した。顔を出してみると、4、5人ぐらいの小じんまりとした集まりで、学会を創立しようという熱気が余り感じられず、せいぜい研究懇話会かフォーラムをつくるぐらいの雰囲気です。一寸意外であった。“学会にするのであれば季刊でもよいから学会誌を出さなければ”と言った記憶がある。しかしこれが上田流とでもいうのであろうか、発会のときは大へんな盛会で感心させられた。本学会の設立はいわば歴史的必然であろうが、上田先生の発議と努力がなければ数年は遅れたであろう。あらためて上田隆三初代会長の功績が偲ばれるのである。

私は先生の後をうけて、会長という重い任務を仰せつかったが、学会の運営には些か頭が痛かった。創立以来まだ年月が浅くて、学会の組織はもとより、運営も軌道に乗っていない上に、創立時代に一寸背伸びした学会活動を行ったこともあって経理的にも苦しい状況にあったからである。その頃の事務所はひどいものであった。古くて狭い部屋に色々と詰めてあるので、役員会もともに開けないぐらいのスペースしかなく息苦しさを感じるほどであった。しかし会議はどうしても長時間にな

揺籃期の日本表面科学会

この学会の大きな特徴は、いうまでもなく、表面の諸問題に関係のある研究者・技術者が専門のわくを越えて集っていることにある。ここでいう“表面”とは何かは、専門によっておのずから違っている。一定のはっきりした定義をしないと気がすまない人は参加しないだろう。総合的な2次学会が必要であることを自明の前提として、上田初代会長は関係者を横広がり集めることに努力された。

1979 (昭和54)年7月上旬に上田氏から連絡があった。学会創設計画に化学系の一人として助力してほしいという話であった。日本化学会の中で関係が深いコロイド・界面化学部会に対しては、まず北原部会長を上田氏と共に東京理科大学に訪問し、平行して個別に依頼する

るので一寸した苦行である。科学の最先端の一角をになう学会が、こんな所で仕事をするなんてどうにも場ちがいであるが、ある意味で日本的であった。

しかし、井上副会長をはじめ役員の方々は心一つにして手弁当で頑張っていたので有難いことであった。会議や集会もできるだけだの所を利用してもらった。この冬の時代の忍耐と努力が実って、2年も経つと学会の基盤づくりも大分自信がもてるようになった。この間に、講演大会の定着化、学会誌のバイマンスリー化、会員名簿の発行、表面科学関係の図書の出版等が推進できた。そこで最後に念願としていた学会事務所の移転をもち出した。

どの学会でもそうであるが、一寸手に余ることは議論は活発であるが決定か否か判断としないままに会議が終る。事務所のこともそういった苦渋を経たが、どうやら皆さんに賛成していただいた。しかし、在京の役員は些か世事にうといようで、結局は土地カンもない私が先頭に立って本郷周辺に適当な空室を探して回った。それが現在の事務所である。契約のときに、会計担当の先生がいつまで待っても金をもってこないものであわてたことが想い出される。丁度首都圏の地価高騰の始まる直前の時期であった。今はすべて嬉しい思い出である。

井上勝也**

ことを続けて、関係者数人を発起人に加わってもらうことができた。しかし触媒学会関係ではかなり異論もあるらしく、当面見合わせるほかないように感じられた。これは学会初期にみられた面白い現象であった。

初めての総会が開かれて会則が承認され、学会として成立したのは9月13日であるから、ずいぶんテンポが速く、さすが上田氏の実行力は抜群と感心した。総会後はすぐに“細則”案などを作ったり、東大に鎌田氏を訪ねて副会長就任を依頼したりした。この時期の上田会長の熱意は並々でなかったが、時には少し熱心が過ぎて、役員が分担したはずのことが理由不明のままに消滅したり、また時には機嫌が悪くて反対意見を述べるのに勇気が必要とした。10月17日に理事に招集がかかり渋谷に行ったところ会長ほか2人だけであったが、レストランで食事しながら“大議論して抵抗する”と私の記録にあ

* 第4期会長、九州大学名誉教授。

** 第4期副会長、千葉大学名誉教授。

る。時間を割り出すと3時間に亘っているのに、議論の詳細を覚えていない。おそらく、もっとゆっくりしたペースで様子を見ながらやらなければ危いというようなことを主張したのだと思う。上田さんには最も気に食わない考えであったろう。いつもこのようであれば普通なら停滞してしまうが、事務室ができ講演会も開かれ会誌も発行されるようになったのは、当時の関係の方々の熱意もまた非常に強かったのである。

エピソード

それは苦難の歴史であった。学会誕生のときは順風満帆であった、日に日に会員数が増加した。その勢で行けば、すぐに2000~3000名になるはずであった。ところが1200~1300名で、会員増は止まってしまった。会費が安かったので、収入の増加が止まってしまった。しかし、多くのやるべきことがあり、遂には出版社に支払う金も事欠く次第となった。当時の会長は、主だった理事から何十万円かずつ借りて、支払いにあてた。これは収入予定以上の多くの事を行おうとした結果であった。これを境に、多くの理事は、会長について行けなくなった。

会長が、この表面科学会を設立されたことは誠に多ししなければならぬ。しかし収入以上の多くの事をしようとした試みは、多くの反省材料を残した。今後我々は、このことを教訓としなければならぬ。

その苦しいときに、女性の事務員が、やめてしまい、事務を執る人がいなくなった。会計理事であった私は、同じ役目の理事K先生と、苦心惨憺をした。ほぼ毎日事務所に行き郵便振替を第一勧銀に持って行き預金化し、少しでも利子が付くようにした。冬の寒い日にこれを行

日本表面科学会第2期理事会（1981、1982年度）

私の会員番号は188番である。最近入会された方の会員番号が2100番台であるので、ずいぶん早く入ったことになる。早く入会したお陰で、第2期(1981、1982年)の庶務理事をやらせていただいた。当時の会長は本学会の創立発起人故上田隆三先生である。またその時の庶務理事は井上 泰氏、大坂敏明、荻野圭三両先生であった。ちなみに庶務理事で入会の最も遅かった井上氏の会員番号は1438で、当時すでに会員番号は1500番台に入っていたと思うので、それからの8年間で日本表面科学会は600余名の入会者を迎えたことになる。これは表面科

* 第6期副会長，慶應義塾大学理工学部。

** 第6期会長，金属材料技術研究所。

多方面の人が知見を交換する場としてこの学会は順調に発展し、現在では会誌“表面科学”がよくその機能を果している。10年の経過は平坦でなかったから、私のように困難から逃避していた者は論外として、学会初期に苦勞された方々に改めて敬意を表したいし、類例少いこの学会の歴史が記念号によって具体的に残されるように願っている。

坂田 亮*

い、なんともむづかしい想いをした。事務所の横の税理士に帳簿の整理の仕方を相談し、それまでの帳簿の在り方のやり直しをしながら、なぜこんなことまでしなければならぬのかと嘆いた。またあるときは、収入・支出を全部整理し終わったあとで、わずかの赤字が出た。わずかであったので、やれやれと思っているところへ未支払の請求書が300万円も出されたこともあった。金庫を預かるものとしては、なんともやり切れない想いであった。

企画副委員長をしている頃、基礎講座への参加者が少なく、これも苦勞をした。委員長になってからは、幸いに企画委員諸氏の多大なご尽力により、受講者が倍増し180人前後となった。受講者が少ないときは、委員諸氏への交通費も支払えなかったが、倍増してから、しかるべく手当をお支払いできるようになった。そのあとの反省会は大変楽しいものであった。

省みて10年、苦しいことの方が遙かに多かったが、現在はそれもほぼ忘れ、いまの隆盛な学会の中で、瞬時ほっとしている。しかしいつまた昔の日が再現するか、気持ちを引きしめておかなければならぬ。

新居 和 嘉**

学の重要性に関する高い認識に比していささか低すぎる数字ではなからうか。もう一段の飛躍を期待したいものである。

とにかく当時はまだ発足間もないこともあって、物事が定常的に動いていなかった。今どうしてそういうことになったのか記憶にないが、1981年3月の通常総会は、資料作りから進行までのほとんどを新庶務理事がつかさどった。私達が庶務理事に選ばれたのはこの総会であるので、本来はそのような業務はそれまでの庶務理事が行うべきであり、私達の出る幕ではなかったのだが、どういさつからか、自分で総会を進行して、自分を役員に選んでしまった。当時はこのような混乱も仕様のな

い時期であった。

会計理事は坂田 亮、金沢孝文両先生であった。当時は会の発足からそれほど間もないこともあって、会の事務局を整備することが最重要課題であった。たまたま本学会の発足から業務を受託代行してくれていた人が引退することになり、その人の事務所を引き継いだ。そのため敷金、机、椅子、クーラー等の購入代金、さらに雑誌の出版経費、人件費など多くの経費が重なり、一方では会費徴収や催促の手順もまだよく定まっていなかった。多くの未収金をかかえ、会計的には非常に大変な時期であった。ついには常務理事から5万円ずつの借金をしたこともあった。このような時期の会計理事の御苦労は察するにあまりあるものがある。あるいは本学会の

最悪の時期ではなかったらうか。

編集理事は河津璋先生、榎本祐嗣氏、企画理事は岡田正和、合志陽一両先生であった。何を相談したか今はもう忘れてしまったが、こういう先生方と夜遅くまで木屋ビル2階の学会事務所で相談した記憶がある。そのほか上村揚一郎氏、大高好久氏ともよくお会いしていた。

こういう波乱に富んだ時期の仕事仲間（仲間と呼ぶには畏れ多い先輩諸氏もおられるが）はまた特別の感慨のあるもので、こういう方々と知り合いになれたことは私にとって非常に幸せなことと思っている。

最後に、本会の創立発起人であり初代会長を勤められ、ある場合には庶務理事としての私の喧嘩相手でもあった故上田隆三先生のご冥福をお祈り致します。